

# 會員の頁

第25巻第5號 昭和14年5月

## 土木學會機構の改革に就て

准員 赤 岩 勝 美\*  
准員 牧 野 邦 雄\*\*

### (1) 序 説

土木學會機構の改革に就て論ずるに先立ち、しばらく現在の學會に對する種々の問題に就て検討して見度いと思ふ。學會の現状に對する各種の不備はしばしばききところであるが、夫等の中の1つに學會誌が餘りに高級で一般技術者大衆には讀み切れないと云ふことがある。然し乍ら筆者の考ふるに、日本に於ける唯一の土木工学の統合機關である土木學會の機關誌が餘りに大衆的に低下することはどうであらうか。それは日本土木工学の活券にも關することであり、延いては斯学の發展を阻止するものではあるまいか。學會は一般技術者にとり親しみ深いものであることは勿論望ましいことではあるが、と云つて學會が一般レベル迄退却することは到底許されないことである。

學會は一般技術者を引きずつて行かねばならない。唯現在の學會誌のみでは大多數の會員にとつて迫力の乏しいものであることは事實であらう。このために會誌を2部にしようと思ふ計畫は多方面から要望もされ又計畫もされて來たことである。この問題に關しては後述の改革案の中で再びとり上げることにして、こゝでは問題の提示文に止めておかうと思ふ。

次に會費の問題がある。會費が高くて一般的になり得ないと云ふこともよくきく問題である。こゝに一般的と云ふのはどの程度迄を指すのかによつて問題は分れると思ふが、兎に角會費は安いに越したことはないのである。この問題もこゝでは單に問題の提示のみに止め後述することとしよう。

次に廣く土木界に目を向けて見ると、餘りに多くの會が、殆ど無秩序に亂立してゐることに驚くのである。我々は土木學會にさへ入つておれば、よく間接的にしる日本に於ける土木界のあらゆる動きに參與し得る、又は夫を知ることが出来るかと思ふとそうは行かないのである。若し我々が水道關係者ならば我々は土木學

會の他に水道協會に入らねばならない。又若し我々が都市計畫技術者ならば我々は土木學會の他に都市研究會と區劃整理協會に入らねばならない。若し我々が道路技術者であるならば道路改良會と近頃出來かけて居る道路技術者協會とかに入らねばならぬであらう。斯くの如く自分等の關係してゐる部門の會丈でも非常に複雑であるばかりでなく、他の方面は一体どう云ふ機構になつてゐるのかと云ふことになると仲々簡單には分らない狀況である。第1會費が色々重なり合つて、月1円足らずの學會費が高過ぎると云ふことにもなつて來る。誠に嘆かはい現象と云はねばならぬ。然し斯う云ふことは又當然起る可き問題である。最近道路技術者協會なるものが設立されたが、之等はすべて必然であり、且つ技術發展の爲にも望ましいものである。現在の如く學會の内部に之等各部門の円滑なる發展と活躍を可能ならしむる様な制度、機構が設けられてゐない以上、上述の如き分立は今後もどしどし行はれるであらう。若し之を放置するならば將來の混亂は恐る可きものがある。

以上筆者は改めらる可き二三の問題を提示して本論の改革案に筆を進めよう。

### (2) 土木學會機構の改革

日本土木界の最も中心的な團體である土木學會が強化されると云ふことは、土木界一般にとり望ましいことである許りでなく、國家にとつても、まことに望ましいことである。又既述せる如く各種の群立せる協會に有機的な連絡、出來得るならば統一を與へることは、實に各會の會員にとり好都合であるばかりでなく、國家にとり是非實現を望まらる可き事柄である。

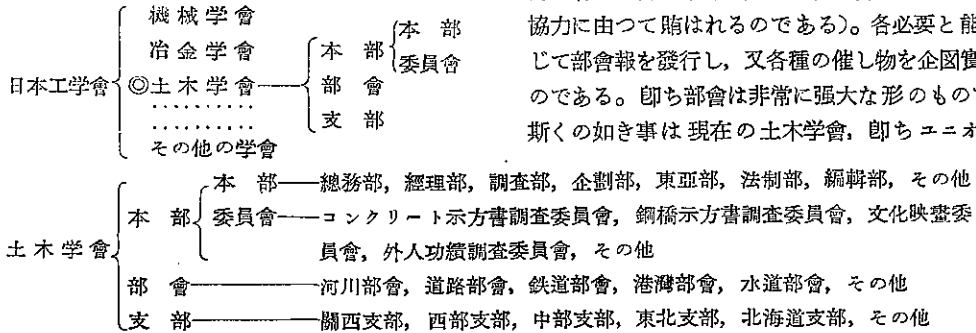
若し日本工學會が今少し強力な團體であつたなら、最近の如き帝國の狀勢にとり如何程の貢獻を工學會が成し遂げて居たかを痛感するのである。従つて我々の改革案は日本工學會から始まる。日本工學會は土木學

\* 工学士 都市計畫福岡地方委員會技師

\*\* 工学士 同委員會技師

會や機械學會その他の學會を分子として結成されること今日と同様であるが、唯今日の如き状態より一層緊密な統一と活潑なる動きを爲す可きである。工學會に關してはこの位にして本論の土木學會の改革案に進む。

我々の計畫する土木學會を表示すると次表の如くなる。



この表の示すところは讀者諸彦の容易に了解し得るところと思ふが、茲に本部とは大體現在の學會に於ける機構と同じものであつて、唯遙かに強力な大規模なものであること丈が異なつて居る。問題になるのは部會である。即ち筆者等の企図するのは、現在水道協會とか、港灣協會とかに分立されて居る各種の會を部會として學會の中に吸収統一するのである。斯くの如きことが可能か不可能かの問題は暫く措き、斯くの如き統一は國家にとり、又各自にとり極めて望まじきことであると云ふことは既述せる如く何人も異存はあるまいと思ふ。異存がないならば多少の困難は排除しても實現に邁進す可きである。さて實現可否の問題は今少しく後に譲り、先に進まう。次に支部であるが是も現在の支部と殆ど同一である。只その地方に於ける各部會關係の中の有識者及その他の有識者を以て首腦部を形成する。このことは本部の構成に於ても同様である。

(3) 部會の構成

讀者諸賢も既にお氣付きのことと思ふが部會の構成が本改革案の「やま」であると共に本案に於ける最大の難點でもある。而してその難點と稱せらるゝ所以のものは、率直に云つてしまへば金の問題であらうと考へられる。その他の問題は本案の重要性、必要性に比較して難點と稱する價値が無いと考へる。金の問題と稱するのは現在の各協會が相當豊かな基本金を有し、又確實なる財源を有して居る。之等の會が學會に吸収

されることは、恰も裕福な町村が重税の市に併合される時の場合に似て居る。之は確かに厄介な問題には違ひない。然し筆者はこれは次の様にして解決出來ると考へる。即ち各部會に對し現在各協會としてなして居ると殆ど同様な半ば獨立的な活動を可能ならしむる様にするのである。具体的に云へば各部會は獨立の會計を有し(勿論本部の費用は各部會の何等かの比率の協力に由つて賄はれるのである)。各必要と能力に応じて部會報を發行し、又各種の催し物を企図實行するのである。即ち部會は非常に強大な形のものである。斯くの如き事は現在の土木學會、即ちユニオンビル

の第何階とかに間借りしてゐる様な土木學會ではちよつと困難かもしれないが、筆者等の夢見るところは大東京の一角に白亜の高樓が聳えて、その家を土木會館と稱し、その幾階もの部屋部屋には既に述べた様な各種の活動体が本據を構へて、内は帝國の土木技術の活動を統轄して國家全体の進展に參與し、外は世界の土木技術の動きに連つて、人類全体の發展に寄與せんとするのである。

(4) 會員の種別、會費及會誌の問題

本案の實現可能性を強調するために、今少しく細部の設計に進まう。部會は必ずしも各部門に亘つて作られる必要はない。部會は各部門の必要と能力に応じて作られる。部會を構成されない部門に關する問題は本部の中で取扱はれる。

さて然らば會員は如何になるかと云へば、會員を分けて次の如くする。

會員：現在の會員とほぼ同性質のもので正規の會費を納入するもの。部會に關係する者は別に部會費を納入する。

准員 A：准員會費を納入する者。部會に關係する場合は會員の場合と同じ。會員と異なる點は必要に応じて准員 B に變ることが出来る。

准員 B：部會にのみ關係する者。會費は部會費のみ納入する。必要に応じ A に變り得。

學生員：學生員會費を納入する者。部會に關係すれば部會費を納入す。

尙 1 人にて各種の部會に關係することは自由である。但し部會費は夫に応じて納入のこと勿論である。

會費は既述せる如く正員會費、准員會費、部會費、學生員會費に分れる。正員會費、准員會費、學生員會費を納入するものは本會誌の配布を受け、部會費を納入するものは部會報の配布を受ける。尙一言す可きは准員 B と雖も土木學會員たることに交りは無く學會の一般的行事に對しその恩惠を蒙り得るものである。

次いで會誌は既に示して來た如く本會誌と部會報に分ける。部會報に就ては論ずる要は無いと考へる。本會誌は次の如き内容を有する。

1. 部會の構成されたと然らざるとに不拘、各部門に於ける高貴なる論說。
2. 一般的雜錄、=ニュース等(部會構成されたる部門の記事は極く簡略に)
3. 學會一般に關する問題
4. 抄 錄
5. その他

斯くの如き組織によつて我々は學會誌を一方に於て大衆化し、而も一方に於て飽く迄權威を維持させることが出来る。又こゝには詳細な財政計畫を示すことはしなかつたが充分會費の平均を低下することが出来ると考へる。

#### (5) 結 語

以上を以て我々の改革案の骨子は述べ得た積りである。斯くて、我々はこの小論の最初の項に提示した各種の問題、即ち學會の統一と強力なる團結——團結は力だ！——學會の大衆化と而も權威の維持、會費の低下等を悉く解決し得たと信ずる。斯くて初めて名實共に權威ある學會が生れる。今や國家は學會の一言一句に權威を認め敬意を拂ふに至るであらう。各種の理想と抱負はこの時に於て初めて實現の緒に就く可きである。

斯くて、若し我々の主張の主旨に於て誤り無くば、あらゆる困難は克服する可きである。若しそれ多少の現状に捉はれて前進を躊躇するが如きことでは、百論は遂に空論として消滅するであらう。從來しばしば叫ばれて來た行政機構の改革等いつの日にか果さる可き！

以上我々の改革案の大体を申し上げた積りである。本案の内容に關しては或は誤謬多いものであるかもしれない。唯我々の望むところは強力な學會が生れて、技術にしる、行政問題にしる、土木に關することは土木學會によらねば二進も三進も動かない様な状態になることを期待するのである。

終りに臨み本小論が一片の理想論として讀み去られることなく、あらゆる有識者、有力者により繰返し繰返し検討を加へられんことを切願して止まないものである。